様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２５２０２９５

研究課題名（和文）戦後ドイツにおけるＮａｔｉｏｎとＥｒｉｎｎｅｒｕｎｇｓｋｕｌｔｕｒ

研究課題名（英文）Nation and Erinnerungskultur in postwar Germany

研究代表者
三宅　晶子（MIYAKE, AKIKO）

千葉大学・普遍教育センター・教授

研究者番号：５０１５７６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、ナチズムとホロコーストがどのようにドイツで忘却され記憶されたかを探求する。そのため、ドイツとポーランドで記念碑・ミュージアム・記念館の調査を行い、演説・文学・映画・教科書・回想等の分析を行った。その結果、記憶には２つの機能があることが明らかになった。記憶は、忘れられた過去を再構成しアーカイヴのように保持する。しかし時には過去の不正を暴き、それを、他者の、特に犠牲者の記憶を受け入れることによって正そうとする。両方の機能がドイツ国民の集合的記憶にとって重要である。　2010年日本独文学会研究発表会でシンポジウム「戦後ドイツの『想起の文化』」を開催し、2011年研究叢書として刊行した。

研究成果の概要（英文）：　This research project studied, how the Nazism and Holocaust were in Germany forgotten and　remembered.I investigated monuments, museums and memorials in Germany and Poland, analyzed speeches,literature,films,textbooks,memoires etc.The results indicated that remembering has two activities. Remembering reconstructs the forgotten past and contains it as a archive, but sometimes exposes the past injustice and　tries to redress it, accepting memories of others, especially victims. Both activities are very important for the collective memory of German nation. According to Alleida Assmann　a new national consciousness is necessary for this collective memory. She called it <reflexive history- identity- consciousness> .
A symposium "Erinnerungskultur in Germany after WWII" was held at the conference of the German Study Association of Japan in 2010. The results of the symposium was published as a study book in 2011.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学　ヨーロッパ文学

キーワード：想起の文化　戦後ドイツ　歴史認識　ベンヤミン　ホロコースト　ナチズム　集合的記憶

１．研究開始当初の背景

本研究は、これまで行ってきた以下のシンポジウム等での Benjamin 研究、Nation 研究を踏まえて、さらに近年の Erinnerung, kulturelles Gedächtnis の理論を研究することによって、戦後ドイツにおける Erinnerungskultur 研究を展開することを目的としている。

・「集団としての身体とイメージ空間」日本独文学会 1992 秋季研究発表会（於筑波大学）

・「Die Analyse des Weckers in den Texten von Walter Benjamin」日独シンポジウム「都市の経験とメディア論　ヴァルター・ベンヤミン」（於東京ドイツ文化センター）

（ここでの報告は、次の論文として発表：Miyake, Akiko, Die Analyse des Weckers in den Texten von Walter Benjamn, Comparatism No.1,pp.112-122. ）

・「ベンヤミン・シンポジウム」東北独文学会（於東北大学）「das dialektische Bild―＜小さな門＞は開くのか？」

（論文として発表：「＜小さな門＞は開くのか？――ベンヤミン『歴史の概念について』最後の言葉」『東北ドイツ文学研究』No. 46、43-75 頁〔査読有〕。

・「＜コンパッションは可能か？＞」『＜コンパッション＞は可能か？』影書房、13－101 頁、166-175 頁。総頁数 250 頁。2003 年

・「声の政治」（日本比較文学会シンポジウム 2006 年 6 月 17 日　日本女子大学)にディスカッサントとして参加　「国民の声／国家の声」を発表、討議。

・「戦争と表象／美術　20 世紀以後」（2006 年 3 月 4,5 日開催の国際シンポジウム）第 4 セクションに参加

（「人間の尊厳を回復するということ」長田謙一編『国際シンポジウム　戦争と表象／美術　20 世紀以後』美学出版、2007 年 2 月）

２．研究の目的

本研究は、Walter Benjamin　が 1930-40 年に使用していた Erinnerung, Eingedenken 概念と、Benedeict Anderson の想像の共同体(imagined political community)としての Nation 論、Aleida Assmann 、Jan Assmann による Erinnerung、Kulturelles Gedaechtnis 研究を検討した上で、Erinnerung と Nation についての糸を探り、戦後ドイツ特有の Erinnerungskultur について考察することを目的とする。具体的研究対象としては、演説、記念碑、展覧会、教科書、映画、文学等を検証し、ショアーについての認識と想起が忘却や苛立ちと抗争しつつ、ドイツの Erinnerungskultur として定着し、さらにはヨーロッパへと展開し、europaeische Kultur der Erinnerung、nationale und europaeische Identitaet という表現すら使われるに至る状況を研究する。

他方、日本における想起との比較、ヨーロッパにおいて、植民地への記憶と責任が差別化されていく状況にも注目する。

３．研究の方法

（１）理論的研究

・Waltr Benjamin の Erinnerung、Eingedenken 概念

ベンヤミンが、ナチズム期に Ueber einige Motive bei Baudelaire(1938), Ueber den Begriff der Geschichte(1940) 等において、Erinnerung・Eingedenken という概念で考えていた思想について考察する。

・Benedict Anderson の Nation 概念

Imagined Communities.Reflectins on the Origin and Spread of Nationalism, における、“ imagined political community ”　としての Nation 概念を考察する。

・Aleida Assmann 、Jan Assmann　の Erinnerungskultur,das kulturelle Gedaechtnis 概念を考察する。

（２）シンポジウムと研究叢書

2010 年 10 月の独文学会（於千葉大学）においてシンポジウムを開催し、本研究を多角的にすすめる。

（３）ドイツと隣接国における記念碑・記念館・博物館等の調査

（４）資料収集と検討

教科書、文学、歴史、映像、法律等に関する資料収集と分析

（５）「想起の文化」の比較研究

想起の文化の比較研究：加害・被害についての集合的記憶・公的想起について、日本・スペイン・イスラエル・アメリカを対象に考察し、比較検討する。

４．研究成果

（１）理論的研究

上記の「２研究の目的（１）」で挙げた概念の検討の後、以下の書物等により、戦後ドイツの「想起の文化」について理論的研究を行った。

Peter Reichel: Politik mit der Erinnerung. Muenchen:Carl Hanser 1995.

Klaus Garber:Nation-Literatur-Politische Mentalitaet. Muenchen:Fink 2004.

Elisabeth Kuebler: Europaeische Erinnerungspolitik. Bielefeld:Transcript 2011.

Harald Welzer,Sabine Moller und Karoline Tscuggnall: ”Opa war kein Nazi”.Frankfurt a.M.:Fischer 20002

（２）シンポジウムの開催と研究叢書刊行

2010年日本独文学会秋季研究発表会にてシンポジウム「戦後ドイツの『想起の文化』」を開催し、その際の発表報告とその後の研究成果を日本独文学会研究叢書『戦後ドイツの「想起の文化」』として刊行した。

（3）ドイツ・ポーランドでの調査

国立ドイツ歴史博物館、ホロコースト記念碑、ホロコースト情報センター、ユダヤ博物館、ドイツ抵抗記念館、オットー・ヴィルト作業場記念館、ザクセンハウゼン強制収容所記念館、オシフィエンチム博物館、ドレスデン歴史博物館、ドレスデン聖母教会を調査し、資料を収集した。

（4）教科書の検討

歴史教科書 Geschichte konkret、

歴史・政治教育教科書　Gesellschaft bewusst における本文記述と設問の検証

独仏共通歴史教科書 Histoire/Geschichte, L’Europe et le monde depuis 1945/ Europa und die Welt seit 1945 における第2章「第2次世界大戦の記憶」「第4課　1945年以後のドイツとその想起の文化」の記述の分析

倫理 Ethik の教科書　Ich bin wichtig における個と家族、ジェンダーの記述の分析

（5）「被追放」の記憶と表現

Bundesministerium fuer Vertriebene (Hrsg.):Dokumentationen der Vertreibung der Deutschen aus Ost-Mitteleuropa, Muenchen,2004.の調査

Hans-Ulrich Treichel の小説　Der Verlorene　を対象に、追放における家族のトラウマと、戦後の営為における想起の消去について分析した。

（6）戦後ドイツにおける「国家」と「人間の尊厳」についての検討

・Deutschlandlied の歴史と現状

・ドイツ基本法1条「人間の尊厳」4条・12条における「良心」の自由、軍人法11条における「良心」の役割の検討；日本の状況との比較

（7）戦後ドイツ文学におけるショアー／ナチズムの記憶の研究

Bernhart Schlink:Der Vorleser

想起における集団的記憶と身体、麻痺の描写、物語構造におけるジェンダー・セクシュアリティの機能について考察した。

Timur Vermes:Er ist wieder da

ヒトラー像の分析

（8）映画における想起の文化

・ナチズム、ヒトラー、独裁の描き方

ルイ・マル『夜と霧』　における編集とナレーションの問題

オリヴァー・ヒルシュビーゲル『ヒトラー最期の12日間 Der Untergang』におけるヒトラーの描き方

デニス・ガンゼル『ウェイヴ』における独裁の描き方

・女性の描き方

ヘルマ・ザンダース・ブラームス『ドイツ青ざめた母』

戦後ドイツの象徴として

ヘルケ・ザンダー『解放する者解放される者』

敗戦後ドイツにおけるレイプ被害の調査について

マルク・ローテムント『白バラの祈り Sophie Scholl― Die Letzten Tage』

抵抗者の聖女化について

ローランド・ズゾ・リヒター『ドレスデン運命の日』

都市部差別爆撃被害への感情移入

マックス・フェールベック『ベルリン陥落 1945 Anonyma—Eine Frau inBerlin』

敗戦後のレイプ被害を記した手記の映画化について

マルガレーテ・フォン・トロッタ『ローゼンシュトラーセ』

女性たちの抵抗・抗議の想起と継承

『ハンナ・アーレント』

ユダヤ人女性哲学者のホロコーストに対する思想と行為について

（9）想起の文化の比較研究

Christoph Cornelissen, Lutz Klinkhammer und Wolfgang Schwentker(Hrsg.):Erinnerngskulturen. Deutschland,Italien und Japan seit 1945.Frankfurt a.M.(S.Fischer)2003.

Helma Lutz, Kathrin Gewarecki (Hrsg.): Kolonialismus und Erinnerungskultur. Muenster(Waxmann) 2005.

・スペイン：内戦とフランコ体制の記憶に関わる「歴史的記憶法」（2007年）や「戦没者の谷」の意味

映画「蜜蜂のささやき」「蝶の舌」に描かれた内戦の記憶

・イスラエル：ショアーの記憶／「ナクバ」の記憶

教科書：「ナクバ」の記載と削除

演劇：　ヤエル・ロネン『第3世代』

ワーク・イン・プログレスとしての作品制作と、パレスチナ人・ドイツ人の描き方、ドイツ・日本での公演の比較

映画：パレスチナ人カメラマン、イマード・ブルナードとイスラエル人監督ガイ・ダビディによるドキュメンタリー映画 Five Broken Cameras　におけ

るインタラクティヴな視線
・アメリカ：ホロコースト・ミュージアム
教育：教科書 Call to Freedom 等におけるホロコーストの記述
ポピュラー文化：映画「ホロコースト」「シンドラーのリスト」、
コミック：アート・シュピーゲルマン「マウス」における「人種」の描き分け

（１０）日本とドイツの教育における「想起の文化」と国民意識
論文「『私たちの道徳』の「私たち」とはだれなのか？」において、日本の道徳補助教材『私たちの道徳』の歴史読み物や偉人紹介において何がどのように想起されているかを分析した上で、ドイツの歴史教科書で何がどのように想起されてきたか、2013 年版で何が新たに加筆されたか、戦後ドイツで議論されてきた「国民意識」とはどのようなものかについて考察した。

（１１）ドイツ植民都市の記憶研究
論文「青島・烟台をめぐるドイツ・日本・中国の文化的記憶　＜I＞　ドイツの「模範的コロニアル都市」　チンタオ」において、ドイツ帝国が「模範的コロニアル都市」「東のベルリン」として建設した Tsingtau の都市建設とその後の想起について考察し、同時代のベンヤミンのベルリン経験と比較した。

（１２）３０年代ベンヤミンにおける「ドイツ帝国」の想起
『1900 年頃のベルリンの幼年時代』において幼年時代に体験した「ドイツ帝国」がどのように叙述され、ナチス期の「現在」からどのように想起されているかを考察し、第 2 次大戦直前のベンヤミンの歴史認識を考察した。

（１３）結論
本研究において、様々な分野の言説・表象等を分析し考察することによって、以下のことが明らかになった。
想起には２つの機能がある。想起は、１）忘却された過去を再構成し、アーカイヴのように保持する。しかしそれは意識的・無意識的に選択的である。また、時には、想起は、２）他者の想起を受け入れつつ過去の不正を暴き、それを正そうとする。それは、他者の、特に犠牲者の記憶を受け入れることによって遂行される。これら両方の機能がドイツの Nation の集合的記憶にとって非常に重要である。
アライダ・アスマンは、ホロコースト記念碑論争の際に（「義務とアリバイの間で」『ターゲルツァイトゥング』1993 年 3 月 20 日）、「国民としての集団的想起」とは、「ドイツ人が行った、そしてドイツ人の名と結びついた犯罪について、世代を超えて維持されなければならない知識を意味する」、と述べているが、この、「世代を超えて維持されなければならない知識」こそが、ドイツの「想起の文化」の基盤を形成してきたと言えよう。そして「国境を拡大して隣人たちにトラウマを与えた国民」は、「犠牲者側の想起の先鋭さと加害者側の想起への無関心」という「センセーショナルなコントラストを解体」しなければならない。ここで求められている「国民意識」は、「もはや密閉された集合的自己意識ではなくて」、「他国の想起や特に犠牲者の想起を顧みる」「他国民との相互的な認知と行動の中でつくられる関係的な自己意識」である、として、アスマンはそれを、「反省的な歴史―アイデンティティ意識」と呼んでいる。
このように反省的な歴史意識を Nation において醸成しようとする営為が、戦後ドイツの「想起の文化」を形成し、他国との和解の場を準備していった。それは、ナチスの過去を想起することによってナチス独裁との切断を実現していくという困難な営為であったが、その際、政治における言葉の力、そして文化における知識と感情の蓄積が、大きな役割を果たしたのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４　件）
① 三宅晶子,青島・烟台をめぐるドイツ・日本・中国の「文化的記憶」＜１＞ ドイツの「模範的コロニアル都市」チンタオ、三宅晶子編『文化における想起・忘却・記憶 』千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 No.268,2013, pp.1-12.
② 三宅晶子、『私たちの道徳』の「私たち」とはだれなのか？　『現代思想』vol.42-6,2014、4 月号 pp.131-147.
③ 三宅晶子、『空気を読む沈黙』をつくるもの、『現代思想』Vol.40-5　2012、4 月号 pp.204-210.
④ 三宅晶子、格差と国民主義を考える、『現代思想』vol.38-5, 2010 年 4 月号、pp.211-225.

〔学会発表〕（計　１　件）
（シンポジウム）
戦後ドイツの「想起の文化」（日本独文学会秋季研究発表会　2010 年 10 月 9 日　於千葉大学）
司会：三宅晶子、
発表者：三宅晶子・内村博信・安川晴基・岩崎稔
三宅晶子発表：ベンヤミンにおける Eingedenken と戦後ドイツの「想起の文化」

〔図書〕（計　1　件）
三宅晶子編著『戦後ドイツの「想起の文化」』
　日本独文学会研究叢書 078, 2011 年.
編者：三宅晶子、
著者：三宅晶子・内村博信・安川晴基
三宅晶子「戦後ドイツの「想起の文化」（まえがき）」pp.1-3.
三宅晶子「戦後ドイツの公的言説における「想起の文化」 責任・アイデンティティ・和解」pp.4-50.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　　三宅晶子（　MIYAKE,Akiko　）
　千葉大学　普遍教育センター　教授
　研究者番号：50157608

(2)研究分担者　なし
　　（　　）

　研究者番号：

(3)連携研究者　なし
　　（　　）

　研究者番号：